

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は  問1 から  問4 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから11ページまであります。
- 5 検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認^{かくにん}しなさい。
- 6 解答用紙は二枚^{まい}あります。
- 7 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 8 解答は全て解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

このページには問題は印刷されていません。

問題は次のページからです。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（*印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

明鹿高校バレーボール部の二年、宮下景は同級生の尾久遊晴らとともに全国大会を目指していたが、練習中に怪我をして以来、今までどおりのプレーができずにいた。次の文章は、試合を控えた合宿の夜、宮下が歯磨きをしていると、誰かがそこに入ってきた場面である。

頭上の電灯が、じー、と音を立てていた。寝たのか怒られたのか、他のチームの騒ぎはもう聞こえてこない。代わりに僕の心臓がうるさかった。

そのとき、誰かがトイレに入ってきた。

廊下にあるトイレだし誰かが入ってくるのは当たり前なのだが、あまりに静かな中で考え事をしていたせいで異常に驚いて、身体がびくっと震えてしまった。入ってきた人も驚いたように足を止めた。鏡越しに目が合う。「あ」と漏らしかけた。歯ブラシをくわえていたから声は出ず、代わりに喉の奥がぐつと鳴った。

相手はマスクを着けていたが、その丸っこい頭の輪郭と薄い

眉、その下の落ち窪んだように見える目元は見間違えるはずがなかった。

和泉隆一郎は軽く会釈する。僕もそれに返す。

彼は便器の方には行かず、僕の隣の洗面器の前に立つと、水色の平べったいメッシュのポーチからなにやら取り出した。横目で窺うと、ポーチを洗面台に置き、取り出したものをその上に丁寧に並べていた。普通の歯ブラシ、先が細く筆のようになっている歯ブラシ、デンタルフロス、歯磨き粉、それらが医療ドラマで見る手術の道具のように整然と並ぶ。

最後に、こん、とプラスチック製の小さなコップを置いた。鏡の中で、また視線がかち合った。その冷徹な目に射すくめられ、気まづくなって僕は顔を背ける。早く出ていこうと思つて、蛇口を捻り、口から出した歯ブラシをすすいだ。

「明鹿の、何セットかライトで出ていた選手か」

水音に混ざって、声が飛んできた。

慌てて和泉の方を向いて、口の中がまだ歯磨き粉だらけだと気づく。僕の顔に注がれる視線を痛いほど感じながら口をゆすぎ、スウェットの袖で口元を拭こうとすると、

「洗面所に来るときは持っておくべきだ」

と、和泉はタオルを差し出してくれた。

「……ありがとうございます」

こわごととタオルを受け取る。和泉はポケットから別のタオルを取り出した。

「君も二年生だろう？ 俺も二年だから、タメ口でいい。」

稲村東の和泉だ、よろしく」

「明鹿の宮下、です。よろしく。タオルありがとう」

ごしごし拭くわけにもいかないと思って、タオルは口元に当てる程度にし、すぐに畳んで返す。和泉は、感情を感じさせない目でそれを見下ろし、

「使った面を内側にして畳んでなかったら、俺は別の洗面所を探していた」

と言って、受け取った。直後マスクの下から、くつくつと聞こえてくる。ぎよつとしたが、どうやら笑っているらしいと気づいて、それで冗談だったんだとわかった。

話しやすい人では決していないけど、少なくともいまは、夕方の遊晴のように「がっかりだった」とか言われる心配はしなくてよさそうだった。

「よくわかったね。僕のこと」

それで僕は、歯ブラシに歯磨き粉をつける和泉に言った。会話の糸口というわけだけでなく、本心だった。何セットカラ

イトで出ていた、と言われて僕は心底驚いていた。

「明鹿は春高予選で見てる」

和泉は平然と言う。「それに、バレーしている人間の顔は基本的に全員覚える」

そんなまさか、と笑ってしまいそうになるが、和泉なら本当に全員、相手校の選手をレギュラーはもちろん、ベンチまで記憶していたとしても、おかしくないかもしれない。やりかねない、と思った。

「そういえば、さつき食堂でミーティングをしていたな」

和泉はマスクを外しながら言った。「今日の話か？」

「まあそんなところ」

全部説明すると長くなるし、和泉は遊晴が「勝ちに行く」と言った相手だ。話したら手の内を明かしてしまうようで、僕は適当に言葉を濁す。

でも、和泉に聞いてみたいことはあった。

「さつき、中学のときの遊晴の話を初めて聞いた。なんで明鹿に来たのか、とか。和泉くんも知ってた？」

ああ、と和泉は頷いた。

「俺も卒業前に聞いた。そのときは、そういう選択肢もあるのかって驚いた。ただ、どうせ高校でも結局バレーをやるんだ

ろうとはわかっていた」

「へえ」

「あいつは、根っからのバレエ馬鹿だろう。あそこまで楽しんでバレエする奴を、俺は他に見たことがない。だからバレエを辞めるとは到底思えなかった」

「和泉くんは遊晴と全然タイプが違った、とも聞いた」

合宿前に遊晴から聞いた話を思い出していた。和泉隆一郎はとことん負けず嫌いで、誰かに劣っていることが受け入れられない性格で、だからたとえ部内で浮いても、努力し続けた。

そうだな、と和泉は口許を歪める。苦笑したらしかった。

「まあ俺にはわからなかっただけで遊晴も内側にはいろいろ抱えてたんだろうが、だけど中学時代あいつを見ていて、自分が思い悩みながらバレエやっていることが、何度も馬鹿みたいに思えたな」

今日の試合での和泉の姿が浮かぶ。自分の上げたトスをチームメイトが打ち切って、チームの得点になる。しかし和泉は無感動な様子だった。それは冷静というより、いま思い返すと機械的とも言えた。

僕と和泉は、バレエしてて
あ
なところが
ちよっと似ている。

この前、遊晴はそう言っていた。

「和泉くんは」

高校バレエ界の注目選手といつの間にか落ち着いて会話できていることに気が大きくなったのかもしれない。それに、隣で歯ブラシを持つ和泉は少しだけ無防備に、普通の高校生らしく映っていた。

「バレエしてるとき、どんなことを考えてる？」

誰になにを訊いているんだ、と、すぐに後悔と恥ずかしさが押し寄せた。しかし引込みがつかなくて「無心、ではない？」と質問を足してしまう。

昨日も今日も、試合中の僕は考えすぎていた。でも、怪我する前は違った気がする。意識は無心というかフラットな状態で、ほとんど自動的に身体は動いていたような。それが遊晴の目には楽しくなさそうに、かつ和泉と似ているように見えるのなら、この質問は聞いておかなければならないと思った。

「試合中という意味でいいか？」

和泉は歯ブラシを持ったまま、じっと鏡を睨みつける。僕が頷くと、

「それなら、無心ではない。無心はありえない」
と、言い切った。

「もちろん、思い悩むこともしない。反省や後悔は雑念だ。修正だけすればいい。試合中に必要なのは、雑念を排除した上で思考し、行動を最適化することだ」

「最適化？」

「八秒だ」

和泉は鏡越しに僕を見据えた。意味を掴もうとしたけど、すぐにはわからない。

「……笛が鳴ってから八秒以内にサーブを打たないといけない、ってルールの？」

違うだろうな、と思いながら口にした。案の定、和泉は首を横に振る。

「僕が言ってるのは、もう一つの『八秒』だ。聞いたことないか」

「うん、たぶん知らない」

「バレーボールにおいて、点が決まってラリーが途切れ、次のラリーが始まるまでの時間。それが、だいたい八秒くらいだと言われている」

初めて聞く話だった。ラリー間が何秒かなんて考えたこともなかった。

点数が決まってから、試合再開の笛が鳴るまで。得点に喜ん

だり、サーブレシーブの陣形に移動したり、サーブを打つ選手にボールを渡し、ボールを受け取ったサーバーが床にボールをついたりする時間だ。言われてみれば、八秒くらいかもしれない。

「で、その八秒が？」

「その八秒間で、考えるんだ」

頭をフル回転させる、とも和泉は言った。「次のラリーで生じうる可能性について、この短時間ですべて洗い出して検討する。そのときのローテーション、ポジション、事前のデータとその日の相手の調子と傾向、自分の調子、味方の調子と傾向。それらをもとに八秒間で考える。パターンを整理して、次の行動を最適なものにする。ラリー中の判断速度が極限まで高まるように」

和泉にとっては当たり前にやってきたことなんだろう。その淀みない自信に満ちた口ぶりから、そして試合中彼の坊主頭の中で無数の思考が渦巻いている様子を想像して、これが一流の選手か、と圧倒される。

でも同時に、僕にもできそうだな、とも思っていた。少なくとも、試すことはできそうだった。ラリーとラリーの間の八秒で、反省とか後悔とか余計なことを考えず、次のプレイの予測を立てる。そんなふうにはバレーする自分は割と簡単にイメージができて、無心になることより、ずっと簡単に思えた。

「反省や後悔は、試合が終わってからだ」

和泉は言った。「存分にやればいい。悩んだり、苦しんだりコートの外でやることだ」

「いまの和泉くんでも悩んだりするんだ」

和泉の喉元からまた、くつくつと聞こえた。

「悩んでばかりだ。自分が下手くそだと思うことも、今日はバレーしたくないなと思うことだってある。ときどきじゃない。頻繁にある。バレーを始めてからずっとそうだ。同じことの繰り返しだ。ただ、俺はそれでいいと思うことにしている」

和泉はゆっくりと続けた。

「悩みながら、もがきながら、それでもバレーを離さないやつが一番強い」

② ぱちり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚があった。正体はわからないけど、ポップコーンがフライパンの上で一斉に飛び跳ねるような、スイッチが切り替わって一瞬のうちに広い部屋の隅々まで照明が灯るような、そんな感覚だった。

「なんだか堅い話をしてしまったな」

和泉は手に持っていた歯ブラシをようやく、口に含んだ。

「明日、明鹿と試合できるのを楽しみにしている」

くぐもった声で言った。「遊晴も、今日俺が試合後にかけた

*発破で奮起するだろうからな。あいつも俺と同じくらい負けず嫌いだ」

僕は少し笑って、そうだね、と返す。和泉の言う「明日の明鹿との試合」に、僕は出ているんだろうか、と一瞬そんな疑問がよぎるが、すぐに払いのける。

「また明日」

僕が言うと、和泉は礼儀正しく目礼した。僕はトイレを出た。

(坪田侑也『八秒で跳べ』問題のため一部改編)

「注」

*ライト…自分のコートの右側でプレーする人。

*タメ口…敬語を使わない言葉遣い。

*夕方の遊晴のように…合宿での練習試合の後、遊晴が和泉

隆一郎に「あまりがっかりさせない

でほしい」と言われていた。

*春高…日本の高等学校バレーボール全国大会の愛称。

*サーバー…サーブを相手側のコートへ打ち込む人。

*発破…荒々しい言葉で励ますこと。

*奮起…ふるいたつこと。

問1

① 喉の奥がぐつと鳴った とありますが、この表現から「僕」が「入ってきた人」に対してどのような印象を抱いていたと考えられますか。「入ってきた人」が誰かを明らかにして、解答らんに合うように書きなさい。なお、印象については五字以内で書きなさい。

問2

本文中の空らん あ にあてはまる言葉を本文中から七字で抜き出して書きなさい。

問3

② ぱちり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚があったとありますが、その前後で「僕」にどのような変化が起きましたか。解答らんに合うように書きなさい。

問4

本文中に 行動を最適化する とありますが、あなたがかつて「最適化」しようとしたことについて、その目的を明確にしながら具体的に書きなさい。その際、次の条件にしたがうこと。

条件1 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

条件2 文章は、五十字以上六十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

二 次の文章Ⅰと文章Ⅱを読んで、後の問いに答えなさい。

文章Ⅰはロボット掃除機の動作について述べた文章の一部です。文章Ⅰの前で、ロボット掃除機がいろいろな事態を想定して部屋の中を動く必要があると述べられています。

(＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

文章Ⅰ「へお掃除ロボット」のしなやかな方略

ただ、用意周到に準備し、その動作を作り込みすぎると、独りよがりな行動となりやすく、柔軟性を欠いてしまうのです。むしろ複雑で未知の環境に溶け込むには、行き当たりばったりに思える行動も、それなりに理にかなっているようです。

それはどういうことでしょう。複雑な環境に適応するために、冗長な自由度(＝選択肢)を備えておき、目の前に差し迫る困難に対しては、その場でのあり合わせを生かしながら凌いでいく。袋小路などに入り込んでも、コツンコツンと試行錯誤を繰り返し、なんなく抜け出していく。この利用できるリソースを生かしながら、その状況に応じてオリジナルな解決策を組み立てていく様は、まさに「ブリコラージュ」そのものです。また「ここはオプションBで!」、それがだめなら「オプション

ンCで行こう!」と矢つぎ早に次善策を繰り出していく。これは「敏捷性」とか、「アジリティ」と呼ばれています。

もう一つのポイントは、「利用できるものは、なんでも……」といった柔軟さや貪欲さです。部屋に配置されたテーブルの脚や椅子、ソファアなどの縁は、お掃除ロボットの進行を妨げる障害物にも思えますが、どうも様子が違うようです。それらと絡むようにして、ちゃっかり新たな進行方向を生みだしてもらい、部屋の中をまんべんなくお掃除してしまうのです。「この部屋のこととは、この部屋に聞け!」とばかり、その制約を拘束条件として生かし、一緒に行動を作りあげる。目の前の「障害」とうまく対峙し、それを素早くチャンスに変えていたのです。

それと忘れてはならないのは、その「愚直さ」です。「人にぶつかったら危ないのではないか……」、「部屋の壁にぶつかるのを承知で、なぜぶつかっていくのか……」、そんな心配は構いなしのようです。① 自らの能力の限界を素直に受け入れ、それを隠すことなく、さらけ出すことに徹底している。

人にぶつかり、怪我をさせることが少ないのは、幾重にも安全装置を備えているからではなさそうです。むしろ、まわりの人たちが気を使い、上手に避けてくれるからでしょう。進行の

妨げとなりそうなものを先んじて退けてあげる。「コードを巻き込んでほしいへん！」と、床の上に散らばったコードを束ねてあげる。そんな気遣いややさしさを引き出してしまうのも、ロボットが自らの状態を隠さず、さらけ出しているからだと思うのです。

文章Ⅱ「いい直し、いい淀みのすすめ！」

「人前で話すときには、自分の伝えたいことをしっかり整理してから、いい淀むことなく、流暢に……」と、そんな呪縛にとらわれてきました。それはわたしだけでは無いと思います。ただ年齢を重ねてみると、「もっと素のままでもいいのでは……」と思っています。ふだんの気取りのない会話の様子などを観察してみると、人とかかわりにおける「しなやかさ」や「レジリエンス」を考える上で、多くのヒントが隠されているのです。

「でー、そうねー」「そこのお店のー、内装とかすてきでー」

「あの、いまー、最近、六本木とかー、銀座とかー、よくお店が出てるんですけどー」

「えー、なんか、壁は白いしっくい*でー、でー」

「柱、黒い、黒い柱が、おっきい太い黒い柱が、ぬっと出て

いる」

「なんていうかなあ、フランスの田舎風*って感じのー、んー」
「そんな感じのレストランなんですね」

かつて利用したレストランの雰囲気*を伝えようとしているのでしょう。とりたてて準備することなく、まさに思いつくままに……。

発話の中に見られる、「えーと」「でー」「あのー」などはファイラーとも呼ばれます。「いま、次の言葉を探してます、まだ話は続くんですよ！」と、いまの心の内を隠すことなく、さらけ出しているわけです。会話の中にあっては、こうしたいいい直しやいい淀みも、それほど気になりません。むしろ、話し手の心の動きがよく伝わってきて、思わず寄り添ってしまうのです。

とりあえず頭に浮かんだイメージを言葉にしてみる。と、もう少し具体的なイメージが膨らんできて、それを新たな言葉で補う。そんな繰り返しになっているようです。言葉や発話は「思考の道具」でもあるのです。

まず印象的だった「内装」の様子を伝えようとしています。「素敵な内装であること」、「六本木や銀座にもあること」、「壁は

漆喰であったこと」「フランスの田舎風であったこと」など、記憶や表現の断片をかき集めながら、相手の手助けも借り、その場でオリジナルな表現を組み立てていく。まさに「ブリコラージュ風の発話」であり、わたしたちは「ブリコローグ (bricolage)」と呼んできました。

自分で表現したいイメージとのずれがあれば、すかさず次善策（ⅡオプシヨンB）を並べてみる。ここでの「いい直し」や「いい淀み」は、コミュニケーションにおける「しなやかさ」や「レジリエンス」を生み出す上で要となる、「敏捷性（アジリティ）」の表れともいえます。②目の前に迫る課題に対して、

「あり合わせ」を上手に生かしながら、凌いでいくわけです。

これらは、一つひとつの発話片や記憶の断片にも当てはまるようです。レストランの中でとくに印象深かった「柱」のことを想起するにも、「黒い柱」のイメージが呼び水になって、「お好き、太い、黒い柱」であったこと、「それがぬっと出ていたこと」など、ばくぜんとしたイメージは、しだいに具体的な表現へと組み立てられていくわけです。

これらの「ばくぜんとしたイメージ」を解釈の余地が残されたもの（Ⅱ解釈の自由度が残されたもの）と捉えることも出来ます。先に述べたように、聞き手の関心やそのうつろいに適

応するために、「解釈の幅のあるⅡ冗長な自由度を備えた」発話を繰り出すというのは、どこか理にかなっています。聞き手に意味を押しつけることなく、相手の解釈に合わせて、その自由度の一部を減じてもらう。つまり「相手の関心に寄り添うならば、自らの作り込みを最小にして、その多くを相手に委ねよ！」というわけです。

（岡田美智男『〈弱いロボット〉から考える一人・社会・生きること』問題のため一部改編）

〔注〕

- * 冗長：…むだが多くだらだら長いさま。
- * 袋小路：…行き止まりになっている道。
- * リソース：…資源。財源。資産。
- * ブリコラージュ：…寄せ集めて自分で作ること。
- * オプシヨン：…選択。選択権。
- * 次善策：…最もよいとはいえないが、次によいこと。
- * 矢つぎ早：…物事を続けざまに手ばやくすること。
- * 敏捷性：…すばしこいこと。
- * アジリティ：…機敏さ。軽快さ。敏捷性。

- *貪欲^{どんよく}…新たな知識や技能を熱心に取り入れようとするさま。
- *拘束^{こうそく}…行動や判断の自由を制限すること。
- *対峙^{たいじ}…二つの勢力が向かい合うこと。
- *愚直^{ぐちよく}…正直で、ひたむきに、ひとつのことに取り組むこと。
- *流暢^{りゅうちょう}…話し方がなめらかなこと。
- *レジリエンス…回復力。復元力。立ち直る力。
- *しつくい（漆喰）…石灰にねん土をまぜてふのりをといた液
 でよく練ったもの。かべや天井^{てんじょう}の上ぬ
 りに使う。
- *発話片^{はつわへん}…発した言葉のかげら。
- *想起…思い出すこと。前にあったことを思い浮かべること。
- *呼び水…ある物事をひきおこすきっかけ。

問1

① 自らの能力の限界を素直に受け入れ、それを隠^{かく}すことなく、さらけ出す ことによる効果を、文章Ⅰの言葉を用いて解答らんに合うように書きなさい。

問2

② 目の前に迫る課題に対して、「あり合わせ」を上手に生かしながら、凌^{しの}いでいく とありますが、文章Ⅰの〈お掃除ロボット〉の例ではどのような動作につながりますか。本文中の言葉を用いて解答らんに合うように具体的に書きなさい。

問3

相手の関心に寄り添うならば、自らの作り込みを最小にして、その多くを相手に委ねよ！ について、次の条件にしたがって書きなさい。

条件1 段落構成だんらくこうせいについては、次の(1)から(2)にしたがうこと。

- (1) 第一段落では、相手に寄り添って自らの作り込みを最小にすることによって、会話の内容はどのような表現に変化するか、本文中の言葉を用いて説明しなさい。

- (2) 第二段落では、第一段落で書いたことに関する、体験した事例や想定できる事例を具体的に書きなさい。ただし、筆者が用いた具体例と同じものは避けること。

条件2 そのほかについては、次の(1)から(3)の条件にしたがうこと。

- (1) 解答は原稿用紙げんこうようしの正しい使い方で書き、書き出しは1マス空けて書き始めなさい。

- (2) また、言葉を正しく使い、文章は百字以上百五十字以内で書きなさい。

- (3) 、や。や「なども一字と数え、改行などで空いたマスも字数に数えます。

